



メキシコヒマワリ

116 編は読み人知らずですが、一人の嘆き祈る人物の深い思いが伝わってくるような賛歌です。

冒頭の **わたしは主を愛する。(1)** との言葉は衝撃的です。これほど直截に信仰を告白している詩編は他にはありません。さらに詩人は **わたしは信じる(10)** とも言っています。**わたし** と主体的に、主の前に自ら立って、素直に信仰を吐露して、祈りを捧げています。詩人の柔らかい心が感じられます。

詩人は **主は嘆き祈る声を聞き／わたしに耳を傾けてくださる。生涯、わたしは主を呼ぼう。(1)** と、神は常に祈りにおいて深く交わる方と告白しています。

続いて、詩人の状況は厳しく **死の綱がわたしにからみつき／陰府の脅威にさらされ／苦しみと嘆きを前にして(3)** 祈っていることがわかります。病気や災難で、または、予期せぬ事故や事件で、拘束され、死を待つ状況に置かれているのでしょうか。**哀れな人を守ってくださる主は／弱り果てたわたしを救ってくださる。(6)** と **弱り果て** ながらも、主の守りを確信して祈りを捧げています。

わたしの魂よ、再び安らうがよい／主はお前に報いてくださる。(7) と、かつて主より頂いた安らぎが再び 自分に与えられると言い聞かせています。これまでも **あなたはわたしの魂を死から／わたしの目を涙から／わたしの足を突き落とそうとする者から／助け出してくださいました。(8)** と、苦難、悲しみ、攻撃を味わった時に助けられた経験があり、感謝の思いがあるからです。**命あるものの地にある限り／わたしは主の御前に歩み続けよう。わたしは信じる／「激しい苦しみに襲われている」と言うときも／不安がつり、人は必ず欺く、と思うときも。／主はわたしに報いてくださった。(9)** 詩人は生きている限り、どんなに苦しく辛い時でも、主の前に立つと言います。

詩人は自分の感謝の思いを言葉で祈るだけでなく、形にして表したいと願っています。**主はわたしに報いてくださった。わたしはどのように答えようか。(12) 救いの杯を上げて主の御名を呼び(13)／満願の献げ物を主にささげよう／主の民すべての見守る前で。(14)** その形とは、民すべての目の前で、主の名に乾杯し、願いが叶ったという感謝の捧げ物をする事です。信仰を具体的な行動と自分の宝を捧げて表わそうと願っています。このことを 17, 18 節でも繰り返して述べています。使徒パウロも **実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。(ローマ 10:10)** と、私たちの信仰と救いの確かさを言い表しています。この時、詩人は **主の慈しみに生きる人の死は主の目に価高い。どうか主よ、わたしの縄目を解いてください。(15)** と、死の床にあるか、縄目を受けているかという、苦難の中にあるのです。けれども、詩人は **わたしはあなたの僕。わたしはあなたの僕** と繰り返し、**母もあなたに仕える者。(16)** と、主に従うことを喜び、母から信仰を学んだこと、信仰を継承している家族であることを告白し、主にすべてを委ねています。

『讚美歌 21』は 431「喜ばしい声ひびかせ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-03-13> を、関連讚美歌としています。ジュネーブ詩編歌はリュートと 16, 7 世紀のヴァイオリンの前身の弦楽器による合奏です。 <https://www.youtube.com/watch?v=ppgBk1NjGJg&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=116>